

郷土室だより

第101号

平成10年9月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 10-057

「続」中央区の「橋」

(その1)

◇再開によせて

平成七年十二月発行の『郷土室だより』第九〇号から連載を始めた「中央区の「橋」」シリーズは、平成十年三月の第九号まで九回続いて、一応終りとしました。ところがその五ヶ月後の八月に、私はまた

『郷土室だより』の執筆依頼を受けました。この江戸ブームです。さらに伝統ある京橋図書館の『郷土室だより』です。執筆者を変えて新しい感覚で発刊を続けたらと、いったんは辞退した上で進言したのですが、図書館側は「読者が続きを待っていて、催促されるのでゼヒ」ということでした。

これは私にとって誠に身に余る有り難い状況といわなくてはなりません。実はそれまでの「橋」シリーズは、最初の構想の半分くらいのところで、やむなく打ち切りになっていたからです。

それはそれで済む話ですが、「読者の希望で」と伺うと、これは執筆者冥利に尽きる話なのです。そこで、心を新にして再び連載をすることを引き受けたのです。

謹んで今後のご愛読をお願い致します。

自然堤防上に掘られた水路



地図：明治17年参謀本部陸軍部測量「東京五十分之一」

◇橋は年表

江戸の川・東京の川といえば、何と言っても隅田川です。そのため前のシリーズでは主に荒川と隅田川にかかる橋を取り上げ、とくに中央区の範囲内にあった両国橋、新大橋、永代橋などにはかなり触れてきました。ところがタイトルは「中央区の『橋』」です。

中央区内には天下の日本橋を始め沢山の橋が掛けられていました。しかし、それらの橋については今まで殆ど取り上げてこなかったのです。

そこで今度のシリーズでは、ある橋が掛けられた時点を確かめることにより、江戸の範囲がどの様に広がっていったかを見ることにしました。

いわば橋の架橋年次を中心にして、江戸市街の拡大を「年表」的に見様とするものです。

というのは四百年前から建設が進められてきた江戸は、現在考えられる以上に大きな自然改造が行われながら、市街地が造り続けられたからです。

◇大川四橋おおかわ

これをさらに具体的に言うと、現在の隅田川は江戸時代には単に大川と呼ばれてきました。

この大川には上流から大川橋（吾妻橋）、両国橋、新大橋、永代橋の四つの橋が掛けられました。

その架橋された年次順に見ると、
万治二年（一六五九）に両国橋。
元禄六年（一六九三）に新大橋。

元禄十一年（一六九八）に永代橋。
安永三年（一七七四）の大川橋の順です。

いずれも江戸城のある武蔵野台地側と、下総の低地地帯を結ぶ橋として掛けられたことはいままでありません。

そして、この四橋の架橋年次と場所は、そのまま江戸が大川を越えて、江東地区に広がっていった順と同じなのです。

その意味で四橋そのものが、江戸発展史の「年表」の役割を果たしているといえましょう。

このような見方から、改めて江戸と、橋を隔てた「対岸」との関係を整理してみることになります。

最初の両国橋は明暦三年（一六五七）の有名な明暦大火で、江戸城の回りにあった幕府の米蔵を始め多くの用途の倉庫のほとんどを焼失させるといふ痛い教訓を生かして、倉庫群を当時の市街地の周辺に移したための架橋でした。

言い換えれば両国橋は大火復興計画の一つだったといえます。大火後、浅草に幕府の米蔵を移し、その対岸の本所に竹蔵（といっても実際は米蔵と建築資材の倉庫）を造った結果、必要になったのが両国橋でした。

この橋の両岸は大川の自然堤防の小高くなった場所、しかも地盤は結構堅くて、当時の技術で江戸時代の地図に描かれているような楕型の埠頭（舟入堀）や複雑な形をした舟入堀を掘るのには、絶好の場所でした。

これを技術的に見れば、日本橋から京橋にかけての材木町一〜九丁目に見られた、慶長十七年（一六一二）に着工され、元禄三年（一六九〇）にその大半が埋め立てられた十本の舟入堀の郊外版、または大火復興事業の結果でもありました。

◇深川開発

二番目の新大橋の場合の江戸の対岸は、浜町東南端からその名も深川元町（現在の江東区常盤の芭蕉記念館の少し南の辺）を結んで掛けられました。深川元町は当時の江東地区開発の一つの拠点でした。

今の地図ではなく江戸時代の地図を見るとはっきり分かることなのですが、この辺りは西は大川の川岸、東は六間堀という「逆くの字」型の水路に挟まれた細長い場所です。

これも浅草米蔵と本所竹蔵の場所と同じように、大川が造り出した自然堤防です。六間堀の形はこの自然堤防の東岸の水際線そのものだったのです。そしてこの自然堤防を足場に深川は撰津からきた深川八郎右衛門のグループが開発を始め、やがてこの深川元町に続く自然堤防の上に清住町・佐賀町・相川町・諸町・熊井町・富吉町・黒江町などの「町」ができていきます。

これらの町についてはこれ以上

の説明は止めますが、元禄六年は家康が江戸に入ってから百三年目に当たります。この百年間に水運都市江戸は大発展したわけですが、その発展を支えたのは日本列島規模にまで拡大した各種の廻船組織でした。

深川地区は江戸側（実際には中央区の海岸線）に展開していた初期の江戸湊の機能を、大川の対岸に広げたものだったのです。なお新大橋そのものについては「中央区の『橋』（その5）」の通りです。

新大橋からわずか五年後の元禄十一年に、これも前に見たように永代橋が掛けられました。江戸側の北新堀町（現在の箱崎）から深川佐賀町を結ぶものです。この橋の役割は前の新大橋の場合とほぼ同じものだったといえましょう。

しかし江戸と深川の間が複線のコースで結ばれた意味は、ずいぶん大きなものだったでしょう。

◇その他の川

最後の大川橋は永代橋架橋の五十六年後の安永三年に掛けられました。江戸の北西の近郊が江戸市

街に取り込まれ始めたことを物語る架橋でした。言い方を変えれば浅草寺の対岸の小梅・請地などの村が町になり始めたための現象だともいえます。

またこの橋の北側の源森川（横川）の水路は、大川と平行して堅川・小名木川と交差してさらに仙台堀・大島川を経て深川に通じる幹線水路でしたが、大川橋の架橋がいわゆる近世都市「大江戸」の総仕上げだったともいえます。

この「江戸四橋」という数え方のほかに千住大橋を加えて「江戸五橋」とする場合もあります（この橋のことは、前のシリーズでも「対岸」を考えた（その3）と、洪水時の状況を紹介した（その8）で取り上げています）。

四橋か五橋かという区別の付いた理由はいろいろありますが、川筋と川の名の変遷を大まかに考えた場合、現在の隅田川の河流の在り方からいえば年代的には文禄三年（一五九四）に一番早く掛けられたのが千住大橋です。その意味からは五橋。

そして千住大橋の場所が江戸の御府内ではなかったと言う点では

四橋になるわけです。

◇江戸城と川

長々と都心の橋に余り関係のないと思われそうな、大川の橋のことを書いてきましたが、その訳は橋には「対岸」があると言う事の確認と、もう一つは東京の都心部の場合、「自然」の川はこの大川（隅田川）だけだといいたかったからです。

もちろん四百年前の大川の自然と今の隅田川の自然が同じだといえるわけではありません。河流・水質・沿岸の状態などは大きく変わっています。

しかし江戸期の地図と現在の地図を比較する限り、大川の姿はまあまあ原形を保っているといえましょう。

それに対して都心部、とくに江戸城のある範囲の地域に関係を持っていた、中小の自然河川のはとんどは、まったく原形を残さないものが大部分なのです。

かつて都心部を流れていた中規模河川には石神井川・平川（のちに神田川・日本橋川となる）・汐

留川などがあり、それぞれに流れ込んでいた、これも多くの小規模河川がありました。今はほとんど形を変え、姿を消してしまいました。

その中で僅かに昔の川の名を地名として、残しているものは、皇居東御苑の北口の「平川」門、「小石川」、「汐留川」河口位のもです。

江戸城建設に無関係だった地域では、渋谷川とその下流の古川や、目黒川などは隅田川の場合と同じく、原形に近い姿を残しているといえます。

つまり、江戸城とそれを取り巻く地域、具体的にいえば現在の千代田区と中央区のほぼ全域の「川」や堀や水路の大部分は人工のもので、都心にある橋はその水路に掛けられたものばかりだったのです。

そして、これが「大川四橋」以外の江戸の都心の橋の大きな特徴だったのです。

◇臨海都市「江戸」

江戸の都心部の成り立ちには、

もう一つの特徴があります。それは江戸城を初め都市活動を支える市街は、海岸（臨海部）に面して成立したことです。そのことは十五世紀半ばに太田道灌の手で造られた江戸城の場合も同様でした。

しかし道灌の江戸城と徳川の江戸城の違いは、道灌の江戸は海岸に立地したままに終わりました。

それに対して徳川の江戸は將軍の代にして四代、実際の年数にして七十年掛けて、初めの江戸の海岸を埋め立てて、新しい埋立地の上に都市の機能を拡大して行きました。

言い換えると江戸という都市は、日本人社会が始めて海に面して都市を造り、さらにその海の沖合に向かって都市を拡大していった「現場」だったのです。

なぜ海に向かって拡大をしていったのかという理由を簡単にいうと、当時の唯一の大量・高速輸送手段だった水運を確保するためでした。

◇江戸の水路の特徴

そのため埋立地の中に「埋め残

し」の部分の計画的に造り、海岸から「毛細血管」的に内陸部に及ぶ堀と水路をたくさん造っています。

またそれとは逆に現在の東京都心部（千代田区大手町・丸の内・有楽町・内幸町。中央区日本橋・京橋・銀座）の小高い土地に江戸前島には、土地を削って堀や水路を造っています。

注 江戸前島とは歴史上の地名で、地形学上では日本橋台地と呼ばれています。

この部分は本郷台地の南に続く場所が駿河台、さらにその南に続く台地の先端です。

そしてここは縄文時代後期から始まった海進期に削られて低地になったところなのです。ですから一名、日本橋海蝕台地とも呼ばれています。

そしてこの海蝕台地の先端の位置は、平成四年に東京都埋蔵文化財センターが『汐留遺跡』を発掘調査した際に、幾つかの興味ある事実とともに確認されて報告されてもいます。

ですから一口に江戸の川といっ

ても、例えば日本橋川の場合でいうと、現在の神田川から分流して九段下へ雉子橋辺までは、ほぼ「平川」の本来の河流部、雉子橋へ錦橋間が「埋め残し」部分。その下流の常磐橋：日本橋：江戸橋間は江戸前島を削って水路を造った部分です。

この様に日本橋川に限らず、「川」のように繋がった水路であっても、場所により、所によって、その成因が全く異なっているのが「江戸の川・東京の川」の特徴なのです。

そしてこの「川」に多くの橋が掛けられたのです。

◇徳川以前の橋

それでは家康が江戸の主になる前、すなわち江戸城と江戸の町が北条氏の支配下に置かれていた時代の、江戸の橋にはどんな物があつたのでしょうか。

『武州文書』という古文書集の中に、本芝式丁目（港区）の名主だった内田源五郎所蔵文書というものがあつて、そのなかに永禄年間

（一五五八～六九）と推定される文書に「船橋」用に六艘の柴船の供出を江戸城代の遠山が江戸刑部少輔あてに命じたものがあります。また天正十四年の三月、九月、十一月と、北条氏が「船橋之用竹」を、江戸城まで届けるように武蔵国都筑郡市尾村の地頭の上原氏に命じた文書もあります。

この「船橋」とはどんな物で、どこに使用したのかは分かりませんが、橋といえば「船橋」と、なんだか、仮設の橋を思わせる文書が残っています。

探せばもっとあるかも知れませんが、徳川以前の江戸の橋に関する資料はこれくらいのものです。

（鈴木理生）

◇東京を語る会 第74回

日時 十月二十四日（土）

午後二時～三時半

演題 江戸の町のなりたち

講師 鈴木 理生 氏

（都市史研究家）

著書 「江戸の川・東京の川」

「江戸の都市計画」

など